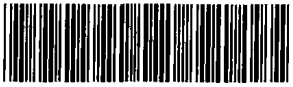
●内村直也自選短篇ドラマ集●

タナトロジー《死ぬ技術》

内村直也

日本放送出版協会

203884



日文 701543769

●内村直也自選短篇ドラマ集●

タナトロジー《死ぬ技術》

内村直也

日本放送出版協会

内村直也（うちむら・なおや）

明治42(1909)年東京生れ。慶応義塾大学経済学部卒業。

学生時代より岸田国士に師事し，『劇作』創刊同人に加わり，昭和10年同誌に処女作『秋水嶺』を発表，同年11月友田恭助・杉村春子らにより築地座で初演。戦後は24年俳優座上演の『雑木林』でスタートし，35年まで民芸・俳優座・青年座に戯曲を書いた。

また，『えり子とともに』（24～27年・NHK）『跫音』（23年・同）など，すぐれた放送劇作家としても知られる。さらに，『夜の来訪者』（プリーストリー原作）のように翻案劇にも才能を発揮している。作詞に「雪の降る街を」がある。

これらの活躍により，放送文化賞(34年)，毎日芸術賞(37年)，勲三等旭日中綬章(57年)を受けている。

タナトロジー《死ぬ技術》
内村直也自選短篇ドラマ集

定価 三、〇〇〇円
昭和六十年十二月二十四日 第一刷発行

著者 内村直也
発行者 藤根井和夫
発行所 日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一―一（〒150）
電話 〇三―四六四―七三一一
振替 東京一―四九七〇一

印刷 三秀舎 製本 石毛製本
検印廃止
©1895 Naoya Uchimura Printed in Japan
ISBN 4-14-005122-1 C0093 ¥3000E
（落丁本・乱丁本はお取り替えいたします）

タナトロジー《死ぬ技術》

内村直也自選短篇ドラマ集

装　画　米倉斉加年

装　幀　蟹江征治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

舞台劇

タナトロジー……9
お世辞……25
弔辞……35
空知らぬ雪……45

ラジオ・ドラマ

跫音……87
娘の元服……109
落葉……121
マラソン……135
画廊にて——漁夫……153

テレビ・ドラマ

追　跡……167
迷　暗……193
星を眺める最後の夜……215
我がうえの星は見えず……235
あとがき……255
記　録……263

〔用語解説〕

M（ミュージック）音楽。

SE（サウンドエフェクト）音響効果。

FI（フェイドイン）しだいに明るくなり画が現われてくる。

FO（フェイドアウト）FIの反対。

UP（アップ）大写し。または音などが大きくなること。

BG（バックグラウンド）音楽などがバックに流れること。

ドーリイイン（DI）カメラ前進。

ドーリイバック（DB）DIの反対。

ディゾルブ（DIS）前の画面と次の画面がダブって変る。

スネークイン（SI）静かに入る（音楽や音響効果など）。

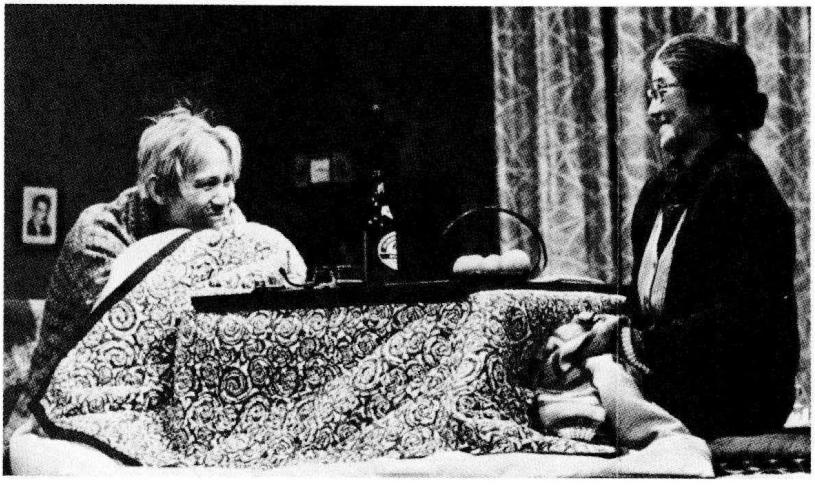
舞台劇

内村直也

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

タナトロジー　一幕

――死ぬ技術――



夫（宇野重吉）と妻（北林谷栄）1982年民芸の舞台から

人物

夫（七十歳に近い）
妻（六十五歳）

老人夫婦の二人暮らしにしては、ゆったりしたマンションの居間

夜

妻が一人で、ソファの上に坐って、テレビをかけながら、毛糸の編物をしている。小さな孫の、真っ赤なセーターが、完成にいま一歩というところまできている。妻は、ずり落ちる眼鏡をもちあげ、電気スタンドの下で、写真入りの、外国の編物雑誌を参照する。……スケールで、セーターの長さを計る。テレビの音声は鳴っているが、殆ど見ていない。時おり、顔をあげて覗く程度。（画面は、客席からは見えない）

妻　……今度は、間違えないで、できそう……。
妻は、セーターを両手で目の前に拡げてみる。これを孫が着た姿を想像して、楽しむ。
チンコン、チンコンとベルが鳴る。

妻はすぐ立って、スリッパをつっかけ、小走りに玄関のほうに行く。
玄関を開ける音
妻の声　あ、お帰りなさい！……ね、割合に早かったじゃありませんか。
夫の声　……うん。
玄関を閉める音
妻の声　どうでしたか、安井さん？
夫が先に部屋に入ってくる。
夫　……うん。
夫は、上着を脱ぎ、ネクタイをはずす。
妻の声　ご病気、よくないんですか？
夫　病気のほうはもう、いますぐどうということはなさそうだ。……案外元気だったんで、驚いたよ。
妻　（出てきて）それはよかったですわね。……、あなた、お着替え、なさる？
夫　もう面倒だ！（そのまま、深々とした肘掛け椅子に、ドカンと腰をおろす）おい、テレビを消してくれ。

妻は、テレビを消す。
季節によっては、部屋着用の簡単なガウンの如きものを、ソファの上から取って、夫の肩にかける。
それから、グラスに水を注ぎ、用意してあった薬と一緒に、夫のところに持ってくる。

妻　お薬さしあげるの、忘れていたの。
夫　もういいんだがなァ、こんなもの呑まなくっても……
妻　いいことがあるもんですか！……はい、（薬とグラスを突きつけ）お呑みになって！

夫、仕方なく呑む。

妻　……あ、お留守中に電話がありましたよ。……あなた、曽田さんて方、知ってらっしゃる？
夫　曽田……曽田……、知らないね。……曽田、なんていった？……名前だよ。
妻　曽田っていえば、わかるだろうって仰有ったんですけど……
夫　……わからない。その、曽田って奴から電話があったんだね。
妻　いいえ、そうじゃないんです。曽田さんて方が逝くなったんですって。
夫　（笑い出す）死んだ奴から電話がかかったら、大変だ！……僕は識らないよ、曽田なんて奴……一体、誰から電話があったんだ？
妻　池貝とか池上とか、仰有ったように思うんですけど、よく聞きとれなかったの。訊き返したんですけど……あたしも少し、これ、（自分の耳を触って、遠くなったことを示す）でしょう、あんまり何度も訊き返しちゃ悪いと思って……
夫　池上なら、中学の時の同級生だ。この間も有楽町で、ひょっこり逢って、誘われてお茶を呑んで、話した。
妻　じゃあきっと、その池上さんですよ。ちょっと出かけて、留守でございますって申し上げたら、なんだか、とても残念そうにしてらっしゃったから……
夫　……ふん、曽田ね、曽田……

つぶやきながら、夫は立ち上り、書棚の処に行き、捜して、一冊の印刷物を取り出す。中学の同窓会名簿である。……その頁を繰りながら……

夫　俺は、大正十年の卒業だったな……、曽田ね、曽田……いないね。……（頁を繰り）……うん、あったあった！　曽田勘一郎って奴だ。……日久の嘱託か……（名簿を持って、もとの椅子に戻りながら）曽田

妻　勘一郎さんも死んだか！

夫　思い出しになった？

妻　全然、思い出さない。……同期の卒業生だが、同級じゃあない。なにしろ、同期は二百五十人もいたんだからね。そんなのを全部おぼえているはずがないよ。

夫　そう、そりゃあ、そうだわ。

夫は再び名簿を開いて、みる。

夫　……しかし、案外死んでないぞ！　俺は半分以上はもういなくなっているかと思ったけど……。みんな、……古希だよ。君、知ってるか、古希ってことばを……

妻　知ってますよ。七十のことでしょ。

夫　〝人生七十古来稀なり〟杜甫の詩のことばだ。

妻　あなたは、今度のお誕生日で、その古希を迎えるのよ。……お祝いしましょうよ。

夫　お祝いなんかやめてくれ！　古来稀なる人生を生きたからといって、祝いに価するようなことはなにもないんだから……。

妻　あたくし、あなたに内緒で、子供たちと相談しているのよ。

夫　やめてくれ、そういうくだらないことは！……。それよりも……それよりも、俺にとっては……。（名簿をみる）どう考えても、もっと死んでるはずだ。男の平均寿命は七十なんだから……。（名簿の最後の頁を開ける）いつ出たんだ、この名簿は……？……うん、三年前だな。……この三年間にきっと、大勢の奴が……

妻　（かぶせて）あなた、池上さんに電話、おかけにならなくていいの？

夫　……そうだな、……（一旦立ち上りかけるが、思い直して、腰をおろす）今日はやめておこう。……あいつは昔からお節介な奴なんだ。曽田勘一郎なんて奴が死のうと、どうしようと、俺に関係したことじゃない。そんな奴のことを、わざわざ報らせてよこす必要はないんだ。

妻　でも、折角ご親切に、電話して下さったんじゃありませんか。

夫　そういうのを親切といえるのかなァ、……僕にはそうは思えないんだ。……奴の場合は……なんていったらいいだろう……昔の友達の消息を実によく識っていてね。……例えば、あいつは、若い女房を貰ったけど、逃げられてしまったとか……あいつは、いまガンでガンセンターに入院しているとか、……あいつも遂

にいけなくなってしまったが、遺産問題で遺族がケンカしているとか……そんな話ばかり、次から次へとしていくんだ。有楽町でお茶を呑んだ時だって、こっちが聞きたいとも思わないのに、奴は、そういう話を際限なく続けて……、つまり、自分が楽しんでるんだ。僕が金を払って、出ようといわなかったら、奴は、コーヒー一杯で、夜まで話していたかもわからない。

妻　そういう人って、たしかにいるわね。……あたくしのお友達にもいます。みんなにあんまり好かれていないけど……。でも、よく考えてみると、寂しいんじゃないのかしら？……昔のお友達が、……段々減っていくのが……。その気持がもとにあって、そういう噂咄(はなし)みたいなものが出てくるんじゃないかしら……。あなただって、そういう時があるじゃないの。

夫　どういう時が？

妻　昔のお友達がなつかしいような時……

夫　……俺にはないね、そんな時は……。

妻　……そうかしら？……今日のあなたって、少しどうかしてらっしゃるわ。……ねえ、お茶でもいれましょうか？

夫　俺はビールを呑む。

妻　いけませんよ、あなた。

夫　俺は、ビールを呑む。……ビールがなければ、ウイスキーでもいい。

妻　ビールはありますけど……、お客さま用のが。……でも先生からあんなにいわれてるんですから……。

夫　俺は方針を変えたんだ。……残り少ない生命(いのち)だ。医者がなんといおうと、俺は俺の方針通りにやることにした。たまにビールくらい呑んだって、どうせ……死ぬ時は死ぬんだ。……おい、持ってこいよ。

妻は、冷蔵庫から、ビールの小瓶を取り出し、グラスと栓ヌキとともに、夫の前のテーブルの上に置く。

夫　（それを見ながら）……毒薬でも運んできたようだ。

妻　あなたったら、すぐ、そういうふうにおとりになる。あたしが意地悪をしているように……。先生が、仰有ったんですよ、アルコールはいけませんて、……絶対にいけませんて。……

夫　あの先生は、酒を呑まないから、わからないんだ。

夫はビールの栓をぬき、グラスに注ぐ。

妻　老化性痴呆疾患だって仰有ったんですよ。アルコールが入ると薬が効かなくなるからまた失禁状態になりますって。

夫はかまわず、少し意地悪い目で妻を見ながら、グラスを目の高さに掲げ、それから、一息に一杯のビールを呑み干す。

夫　これがビールだったか！　ビールも捨てたものじゃないな。人生にはまだ楽しみがある。

妻　外では、呑んでくるくせに……。ちゃんと識ってますよ。

夫　識っていてくれれば、それでよろしい。男の世界には、つき合いで、どうしても呑まなければならない時もあるんだ。

夫は、ゆっくりと楽しみながら、ビールを注ぐ。

夫　俺は、この間うちから、死について考えてきた。この俺にも、そういう時が迫ってきていることをヒシヒシと感じる。

妻　でも先生は、無理なことさえしなければ……

夫　もうここまできたら、先生じゃあない。……俺はね、……僕はね、どんなことがあっても、君よりも先に死ぬことに決めたよ。男というものは、女房より先に死なければいけない。〝お前百まで、ワシャ九十九まで〟とはうまいことをいったものだ。……ね、ババさんや、そう思わないか？

妻　……そうですかね。

夫　……ここまできたら、……亭主が先に死ななければ、……この歳になって、男が遺されるってことは……実に惨めだ！　全く惨めで、……見ちゃいられない。

妻は、ソファの元の場所に戻って、編物を続けている。

妻　なにがそんなに惨めなんですか？

夫　安井がさ、安井の方がさ。

妻　でも、案外元気だったって……

夫　僕は、あいつが、二度目の胃の手術をやって、家で臥てるって聞いて、急に思いたって見舞いに行ったんだが……、ベルを押して、かなり長い間待ったが誰も出てこない。また入院でもしてしまったかな、仕様がない、帰ろうと思いながら、ちょっと玄関の格子戸に手をかけてみたら、開くんだよ。……中に入って、三和土の上から障子越しに「安井、いるか？」って大きな声を出したら、奥のほうから「おう！　誰だ？」って、安井の声が返ってきた。そしてあ奴が寝間着の上にうす汚れた丹前をひっかけて出てきた。……あ奴は、あの、昔の、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com